

福 井 県 医 師 会

だより

第582号 平成21年(2009)12月



アンデスの民

鯖江市 今野 利男

表紙写真説明：アンデスの民

鯖江市 今野 利男

ペルーのクスコからチチカカ湖に向かう途中、村の民家に立ち寄りフォルクローレ（民族音楽）を聴きました。写真はそのとき踊りを披露してくれた親子です。男の子は恥ずかしがりやで、ずっとお母さんの手を握っていました。

醫 縫 録

ケオス、新型インフルエンザ

総務担当理事 広瀬真紀



最初にお断りしておきたいと思います。

本稿執筆を始めたのが10月中旬、福井県定点あたりの報告数は1.75であり非常に予想を立て難い中での投稿となりました。

混乱) メキシコからの一報が世界を駆け巡って6カ月。未だにこの病原体は2類にも5類にも属していない。既に神戸、大阪を混乱に陥れ一度関心が薄れたのち沖縄へと波及。今も混乱と困惑は拡がるばかりである。世界で最も困惑している人と云えば、我が国の尾身茂先生を退け WHO 事務局長の座についた Margaret Chan 氏ではなかっただろうか。今こういった感染症専門家の危機管理対策は正念場にある。我々も発生直後の5月連休前には矢継ぎ早の会議を設置する事になり、暗中摸索の日々が続いた。準備の殆ど終了した5月24日の県医学会の中止を大仰とみる向きもあったが、危機管理一点を鑑みればこれで良かったのではないだろうか。医界として他に規範を示す必要があったのである。僅か半年前までは、来るかもしれない新型(H5N1)インフルエンザ対策で頭がいっぱいだった筈だ。薄弱、机上の空論であったガイドライン。それがそのまま実行ステップとして踏み込まざるを得なかった現実に空港検疫活動の茶番があった。どの情報が最新なのか確かめなければならない朝令暮改の厚労省通達。混乱という名のウイルスも現実のウイルス同様どんどん拡がっていったのだ。本来、鳥インフルエンザ(H5N1)対策として企画された9月13日のウイルス感染症研修会も直前にH1N1にシフトせざるを得なくなり、二重焦点となった内容が一段と混乱を引き起こした感は否めない。

今回の新型インフルエンザの毒性をどの程度と見極めるのだろうか？

本質) 現在の南半球の状況を季節型となら変わり無いとする情報もあるが、CDCはModerateという表現を使っている。柏木先生は弱毒性の意味は当てはまらぬと述べておられる。従来のもとは違うと

いう認識を持つ必要があるのではないだろうか。そこには、リスクのない若い人も亡くなっているという現実がある。

対策) と、なると我々は蓄積された知識と研ぎ澄ました感性を持って慎重に行動すべきであり、細かい情報の集積とその共有が最優先されるはずだ。11月から来年1月。ピーク予想ができる事で少し気持ちが和らぐ。軽症例・重症例、ゆとりを持った対策が可能だ。しかしその一方で、地域内で十分な話し合いも必要とされ、場合によっては冬場のピーク時に輪番制も考慮しなければならない。おおよそ12週間、医師として逃げ出す事はできない。電話再診による院外処方も可能であるし、定点患者数が10人を超えれば病床数オーバーは容認される。重症例対策は県医師会会議の中でも議論の中心となり、その方向性は示されたはずだ。これらの県民への広報も大切である。ただ、行政側は重症数を従来の季節型と同じと考えているふしがあり、差し迫った危機感はない。ICU・NICUの空床はどこにあるのか、稼働可能なRespiratorはどこにあるのか、誰がその情報を握るのか、行政側とさらに踏み込んだ話し合いが必要と考えているのは私達だけだろうか？

ワクチン接種問題は漸く節目を迎え、秩序が形成されつつある。状況によって接種が一回で済むならば全ての希望する人々に国内産ワクチンが行き渡るかも知れない。季節型インフルエンザのピークに重ならなければまたこの新型のピークも来ないかも知れない。第二波、第三波、そして関心の薄れてしまった鳥インフルエンザ(H5N1)対策。本稿が出る頃にはどのような局面を迎えているのだろうか。ケオスが訪れるのか？コスモスが維持されるのか？今は唯、静謐が訪れることを望むばかりである。